リグ・ヴェーダのヴァルナ讃歌について

——ヴァルナ讃歌に關する考察の一節——

稲津紀三

一　リグ・ヴェーダについての觀點と古詩篇の意義

リグ・ヴェーダの讃歌は、インド精神史の源泉をなすが、これをとりあつかう上に忘れてならないことは、リグ・ヴェーダは、單に神話や宗教感情をうたった詩であるのではなく、アーリヤ人が初めてパンジャーブ地方を開拓し、やがて中國地方に移つてこの地にインド文明の基礎をきずいたところの、かれらの國土建設の歴史と、それを主導した精神との、全體を表現しているという事實である。この觀點から見なおすと、讃歌が、幾世紀にもわたる歴史の裏づけを得て、非常に現實性をもつて理解されてくる。そして、パンジャーブ時代に產出されたと推測される古詩篇が、とくに重要な意味をもつてくる。

リグ・ヴェーダ本集の構成を注意すると、十卷一〇二七篇の詩篇は、大別して二つの層にわけられる。（一）第二卷より第七卷までの六卷は、それぞれ、上代の代表的な詩聖（リシ）とその一族の家集のような性格をもち（後表參照）、パンジャーブ時代に誦出された詩篇が、主要な內容になつている。そのなかにもなお新古の層が含まれているが、總じてこれを「古詩篇」と稱しておく。（ずつと後期の作品もこの中に混入しているが、それは內容と形式から比較的容易に見わけられる）（二）第一、八、九、十の四卷は、アーリヤ人の主力が東漸してクル地方に移つてから、この本集の編集される頃までにつくられた詩篇を含むものと見られ、この時代の國土、社會、宗教、思想を反映する。

古詩篇と、新しい層のものと比較すると、讃歌のうえに、かなり鮮かな相違があらわれ、同じインドラ讃歌やヴァルナ讃歌でも、同一にはあつかえない。そして、詩としての內容は、古詩篇の方がすぐれている。草創時代の緊張した生活に裏づけられて、精神的創造も大きく行われたものであろう。

この時代に、かれらの生活の樞軸をなしたのは、先住民との戰鬪である。その戰鬪をとおして國土の建設が行われる。それで、軍神インドラの信仰が非常につよくおこつて、戰勝を祈願するインドラ讃歌にすぐれたものが多くあらわれる。また、パンジャーブ地方の自然環境を基礎にして、格調の高い自然讃歌や、特異なインドラ神話が創造される。そして、そうした生活のなかから、深い宗教的精神や、哲學的精神が目ざめて、それが、アグニ讃歌や、ヴァルナ讃歌に表現される。後期の讃歌では、古詩篇を生んだ自然的生活的基盤をはなれて、前代の型を踏襲するので、創造的精神が乏しくなつている。

それゆえ、古インドから今日まで一貫しているところの、インドの最も高い精神の傳統を知るためには、リグ・ヴェーダの古詩篇をさぐることが必要になる。ことに、そのなかのヴァルナ讃歌に、宗教的にも哲學的にも、最も高い精神が表現されている。このことは、すでに多くの碩學によつて注意されてきたが、なお充分に解明しつくされたとは言い難い。それで、ここでは、あらためて古詩篇のヴァルナ讃歌を分析することからはじめて、それが何を意味するかを考えてみたいと思う。

二　古詩篇六家集にあらわれたヴァルナ讃歌

まず、古詩篇六家集のなかに、ヴァルナ讃歌が、どういう形であらわれているかをまとめて示し、これを基そにして考察をすすめたい。結論を先にいうならば、アグニ讃歌とインドラ讃歌は、數も全讃歌の半ば以上をしめ六家集を通じて、同様の重要さをもつてとりあつかわれていて、明かに、民族的な信仰であることを示しているが、ヴァルナ讃歌は、數も少く、かつ、ヴァシストハとアトリ家集にまとまっているだけで、他には數篇散見されるにすぎない。これは、民族的な信仰でなく、特殊な一族に傳承されたか、或はすぐれた人格によつて把握された信仰であることを、示している。そして、この點にヴァルナ讃歌の特質が見いだされるのである。

古詩篇六家集讃歌全表

（　）内の數字は各卷詩篇の序數を示し、傍線を附したものがヴァルナ讃歌で、その部分の〔　〕内の數字は、その詩編の詩句の數を示す。

第二卷（II Maṇḍala) Ṛiṣi Gritsamada 家集　四十三篇　第一集、Agni 十篇（1—10）。第二集、Indra 十二篇（11—22）。第三集、Brahmanaspati (Bṛihaspati) 四篇（23—26）。第四集、Āditya と Varuṇa 三篇（27 Āditya〔17〕, 28 Varuṇa〔11〕, 29 Viśvedeva 中の Āditya Varuṇa〔1—7〕）。第五集、全神 Viśvedeva 三篇（30—32）。第六集、風雨神五篇（33 Rudra, 34 Maruts, 35 Āpas, 36, 37 Somapā）。第七集、種々の神六

篇 (38 Savitṛi, 39 Aśvin, 40 Soma-pūshan, 41 諸神七歌——〔a〕 Vāyu, 〔b〕 Mitra-Varuṇa 〔4—6〕, 〔c〕 Aśvin, 〔d〕 Indra, 〔e〕 Viśvedeva, 〔f〕 Sarasvatī, 〔g〕 Dyaus-Pṛithivī——42, 43 Śakunī)

第三巻 (Ⅲ Maṇḍala) Ṛiṣi Viśvāmitra 家集 六十二篇 第一集′ Agni 二十九篇 (1—29, その中 3 祭柱′ 12 Indra-Agni, 26 Agni-vaiśvānara)° 第二集′ Indra 二十四篇 (30—53, その中 33 詩聖と二河の對話篇′ 39 嘆の歌′ 47 Maruts をともなえる Indra)° 第三集′ 全神 Viśvedeva 四篇 (54—57, その中 56 三界の諸神)° 第四集′ 諸神の歌 五篇 (58 Aśvin, 59 Mitra 〔5〕, 60 Ribhu, 61 Ushas, 62 六小篇——〔a〕 Indra-Varuṇa 〔3〕, 〔b〕 Brahmanaspati, 〔c〕 Pūshan, 〔d〕 Savitṛi, 〔e〕 Soma, 〔f〕 Mitra-Varuṇa 〔3〕

第四巻 (Ⅳ Maṇḍala) Ṛiṣi Vāmadeva 家集 四十八篇第一集′ Agni 十五篇 (1—15, その中 13, 14 Sūrya と共に)° 第二集′ Indra 十七篇 (16—32, その中 18 Indra の誕生′ 26, 27 Indra と鷲′ 28 Indra-Soma)° 第三集′ Ribhu 五篇 (33—37)° 第四集′ Dadhikrā 三篇 (38—40)° 第五集′ 双神の歌十篇 (41, 4 Indra-Varuṇa 〔11〕〔10〕, 43, 44, 45 Aśvin, 46, 47, 48 Indra-Vāyu, 49, 50 Indra-Bṛihaspati)° 第六集′ 諸神の歌八篇 (51, 52 Ushas, 53, 54 Savitṛi, 55 Viśvedeva, 56 Dyaus-Pṛithivī, 57 Kṣetrapati, 58 牛酪の歌)°

第五巻 (Ⅴ Maṇḍala) Ṛiṣi Atri 家集 八十七篇第一集′ Agni 二十八篇 (1—28)° 第二集′ Indra 十二篇 (29—40, その中 40 牡牛と Indra, Indra とアトリ詩聖)° 第三集′ 全神 Viśvedeva 十一篇 (41, 42, 43, 44 全神′ 45 光りと雨の諸神′ 46 全神′ 47, 48 Sūrya と′ および′ それと共なる諸神′ 49 全神′ 特に Savitṛi, 50 Naitri, 51 五小篇)° 第四集 Maruts 十篇 (52—61)° 第五集′ Mitra-Varuṇa 十一篇 (62 〔9〕, 63 〔7〕 祈雨歌′ 64 〔7〕, 65 〔6〕, 66 〔6〕 Varuṇa Mitra Aryaman, 67 〔5〕, 68 〔5〕, 69 〔4〕, 70 〔4〕, 71 〔3〕, 72 〔3〕)° 第六集′ Aśvin 六篇 (73—78, その中 78 〔b〕 は救濟の祈り)° 第七集′ Ushas と Savitṛi 四篇 (79, 80 Ushas, 81, 82 Savitṛi)° 第八集′ 諸神の歌五篇 (83 Parjanya, 84 Pṛithivī, 85 Varuṇa 〔8〕, 86 Indra-Agni, 87 Maruts Vishṇu)°

第六巻 (Ⅵ Maṇḍala) Ṛiṣi Bharadvāja 家集 七十五篇 第一集′ Agni 十六篇 (1—16, その中 7, 8, 9 Agni-vaiśvānara)° 第二集′ Indra 三十一篇 (17—47)° 第三集′ 全神 Viśvedeva 五篇 (48—52)° 第四集′ Pūṣan その他數篇 (53, 54, 55, 56, 57, 58 Pūṣan, 59, 60 Indra-Agni, 61 Sarasvatī)° 第五集′ Aśvin と Ushas 四篇 (62, 63 Aśvin, 64, 65 Ushas)° 第六集′ 諸神の歌十篇 (66 Maruts, 67 Mitra-Varuṇa 〔11〕, 68 Indra Varuṇa 〔11〕, 69 Indra-Vishṇu, 70 Dyaus-Pṛithivī, 71 Savitṛi, 72 Indra-Soma, 73 Bṛihaspati, 74 Soma-Rudra, 75 武器の歌)°

第七巻 (Ⅶ Maṇḍala) Ṛiṣi Vasiṣṭha 家集 百四篇 第一集′ Agni 十七篇 (1—17, その中 13 Agni-vaiśvānara)° 第二集′ Indra 十六篇 (18—33, その中 33 は十王の戰の歌で Vasiṣṭha

を神格化す)。第三集、全神 Viśvedeva 二十二篇 (34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43 Viśvedeva, 44 Dadhikrā, 45 Savitṛi, 46 Rudra, 47 Āpas, 48 Ribhu, 49 Āpas, 50 治病の祈願、51, 52 Āditya と全神、53 Dyaus-Pṛithivī と全神、54 Vastopati, 55 Yama の二狗と眠りの歌)。第四集、Maruts 四篇 (56—59)。第五集 Mitra-Varuṇa 七篇 (60 [12], 61 [7], 62 [6], 63 [6] Mitra-Varuṇa　Sūrya, 64 [5] Aryaman, 65 [5], 66 六小篇——[a] Mitra-Varuṇa [1—3], [b] Āditya [4—6], [c] Aryaman, Mitra-Varuṇa [7—9], [d] Mitra-Varuṇa, Aryaman [10—13], [e] Sūrya [14—15], [f] Mitra-Varuṇa [16—19])。第六集、Aśvin 八篇 (67—74)。第七集、Ushas 七篇 (75—81)。第八集、Indra-Varuṇa 四篇 (82 [10], 83 [10], 84 [5], 85 [5], 十王の戰の歌を含む)。第九集、Varuṇa 四篇 (86 [8], 87 [7], 88 [7], 89 [5])。第十集、双神の歌七篇 (90, 91, 92 Indra-Vāyu, 93, 94 Indra-agni, 95, 96 Sarasvatī-Sarasvat)。第十一集、諸神の歌六篇 (97 Indra-Bṛihaspati, 98 Indra, 99 Indra-Vishṇu, 101, 102 Parjanya)。第十二集、諷刺と呪詛歌二篇 (103 蛙の歌、104 呪詛歌三小篇——[a] 悪人と魔の絶滅をインドラとソーマに祈る。[b] 悪人と魔の絶滅を祈る。[c] 魔靈の呪詛)

以上によつて、古詩篇にあらわれた全讃歌の體系が明かになる。各卷ともアグニ讃歌を最初におき、次にインドラ讃歌、次に全神讃歌(或はこれを略し)、次に各詩家の特色を示す讃歌をおさめている。これによつて、アグニ崇拜と、インドラ崇拜とは、全民族に共通するつよい信仰であつたことが示される。ヴァルナ崇拜はそれとは趣きを異にし、特殊な詩家の傳承のようである。ヴァルナ讃歌の全體をまとめると、次のようになつている。

一、ヴァルナ一神にささげる讃歌六篇（第七卷に四篇、第五卷、二卷に各一篇）

二、ミトラ・ヴァルナ双神にささげる讃歌二十一篇（第五卷に十一篇、第七卷に七篇、第二、三、六卷に各一篇）

三、インドラ・ヴァルナ双神にささげる讃歌八篇（第七卷に四篇、第三、六卷に各一篇）

四、アーディトヤ群神にささげる讃歌四篇（第七卷、二卷に各一篇）

殆んどが、第七卷と五卷にまとまつていて、これによつてヴァルナ崇拜は、主として、ヴァシストハとアトリの、兩詩家に、把持傳承された信仰であるように見える。それだけに民族的な信仰よりも、宗教的哲學的に、深い精神を表現している。それを、讃歌の內容から明かにしたいと思う。